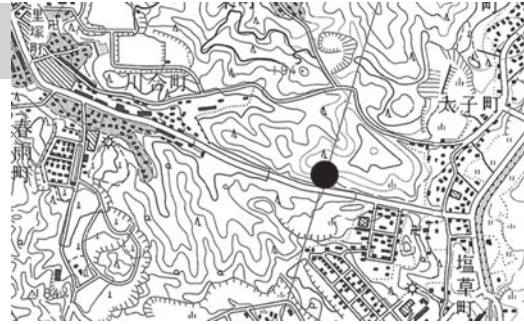


まんとくとうげ
万徳峠窯跡

所在地	瀬戸市川合町地内
調査理由	主要地方道瀬戸設楽線道路改良
調査期間	平成15年8月～12月
調査面積	1,000㎡
担当者	藤岡幹根・酒井俊彦・鶴飼雅弘



調査地点 (1/2.5万「瀬戸・猿投山」)

調査の経過 万徳峠窯跡は、瀬戸市川合町地内に所在する。調査は主要地方道瀬戸設楽線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受け、平成15年8月から12月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

遺跡の立地 遺跡は菱野丘陵東部、市道塩草線万徳峠から西に展開する谷の北側標高約173mに位置する。周辺には川合C窯跡・川合D窯跡・川合F窯跡・太子A窯跡など中世の山茶碗・施釉陶器の窯跡が集中する。また赤津川を隔てた対岸には、縄文時代から近世の複合遺跡である惣作・鐘場遺跡がある。

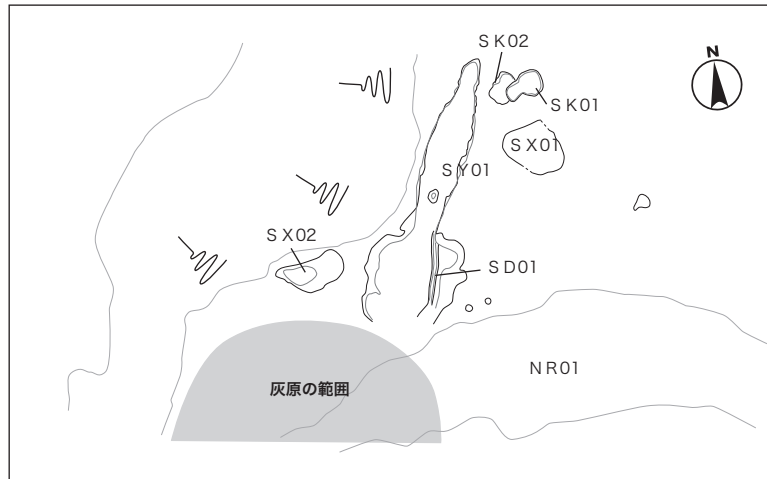
調査の概要 調査は盛土を除去し、窯体及び灰原の範囲を確認しながら行った。その結果分焰柱を有する窖窯1基(SY01)、および作業場と考えられる遺構を確認することができた。SY01は西に展開する谷(NR01)に向かって立地し、花崗岩の岩盤をくりぬいて構築されている。焚口から煙道までの全長は9.5m、中軸線はN-24°Eを測る。平面形はすべて残り、焚口で幅1.1m、分焰柱付近で幅1.7m、焼成室の最大幅は2.2mを測る。煙道部から焼成室まで22.5°と一定の傾斜を保ち、分焰柱から焚口までは19°とやや緩やかになる。

前庭部の最大幅は5.0mを測る。一部は攪乱を受けているものの、2面の整地層を確認した。また窯体に対し右側に排水溝(SD01)が伸びている。焚口の壁面は垂直に立ち上がり、床面直上では炭化物が認められた。分焰柱は高さ30cmを残し、焼成室側では粘土による補修痕が残る。焼成室は全長6.1m、煙道に近い部分では天井の一部が崩落した状態で検出された。さらに天井を取り除くと、最終焼成時の馬爪型焼台が遺物とともに現位置を留めていた。焼台の分布をみると、分焰柱に近い部分では山茶碗のものが多く、その上部では小皿が目立つ。また窯体の断ち割りの結果、床面は少なくとも1回以上の補修を受けていることを確認した。煙道の長さは1.8m、ダンパー付近の幅は0.9mを測る。煙道は先端部までを確認することができたが、ダンパーは流失していた。

灰原は前庭部からNR01に向かって広がり、灰釉四耳壺・山茶碗・小皿・窯道具などが出土した。NR01は全体に2次堆積の様相を示し、上層は盛土や攪乱の影響を受けている。しかし下層では灰釉四耳壺・瓶子・水注・山茶碗・小皿・窯道具などの遺物、焼台が出土した。

SY01周辺の遺構としては、作業場と考えられる遺構を2ヵ所確認することができた。そのうちSX02は、焼成された山茶碗を覆うように、粘土を敷き詰めた状態で検出された。またSK01・SK02では、炭化物・焼土を含むシルト層から山茶碗、水注の破片が出土した。

まとめ SY01最終焼成時の出土遺物として、山茶碗・小皿・仏供具・入子が挙げられる。また灰原から出土した四耳壺・山茶碗が古瀬戸前期の様相を示すことから、この窯が山茶碗・古瀬戸を併焼していたことが明らかになった。今回の調査により、川合地区における中世窯業生産の実態を示す1資料が加わったと位置付けることができよう。(鶴飼雅弘)



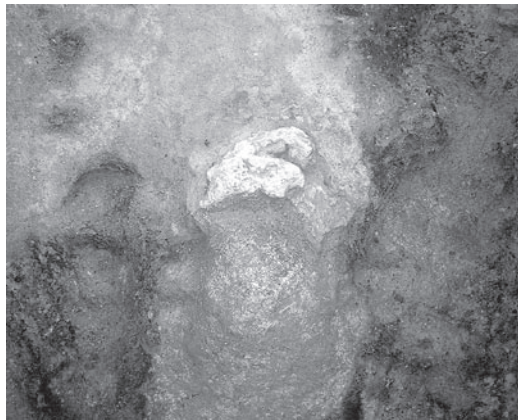
主要遺構配置図 (1 : 400)



SY01完掘状況 (南から)



SY01煙道 (南から)



SY01分煙柱



SY01焼台出土状況



SX02粘土検出状況 (西から)



灰原堆積状況 (西から)